



## インド古典舞踊とひとすじの光

関西日印文化協会理事  
マルガユニティー主宰

モガリ 真奈美

インド古典舞踊の中で最も古いと言われている南インド（タミルナード州）発祥の古典舞踊をBharatanatyam・バラタナーティヤムといいます。その起源は資料によっては、2000年前～、4000年前～、5000年前～と様々な情報があります。

興味深いのは紀元前2500年～紀元前1800年にかけて繁栄したと言われているインダス文明のモヘンジョダロやハラッパーなどの古代都市には、ドラヴィダ系の言語を話す民族が住んでいたと推測されており、遺跡、遺物からは樹木崇拜、蛇神崇拜、女神崇拜、沐浴の習慣などが発見され青銅の踊り子像も発掘されていることです。

ドラヴィダ人はアーリア人の侵攻により南に移動し、南インドに定住していくことで、古代文明を受け継ぎ樹木や蛇にみられる生命力にあやかる信仰や、母なる大地に豊穡をもたらす自然の恩恵に感謝し、また畏敬の念を表し、家族の平和や一人一人の幸せを祈ることを現代につながる揺るぎない「祈り」として表してきたと思われまます。その「祈り」は南インド古典舞踊の起源と言われており、その昔、神々との交流する手段であったこと

は最も古い舞踊であるという所以であると思われまます。

しかし、紀元前1000年～800年頃アーリア人たちの信仰の教典であるヴェーダによって自然現象を神格化する多神教や祭祀が重要視されるようになり以前からの土着信仰は影を潜めるようになりまし



た。

そのころ聖バラタ・ムニによりインドにおける最古の舞踊・演劇に関する教典「ナーティヤ・シャーストラ」が書かれています。舞踊に関わる章では、舞踊で用いられる身体の細部それぞれの動きが分析されて詳細に記されています。その影響は、他のアジア諸国（タイ・ビルマ・インドネシア）に伝わる民族舞踊の原形になっています。

この「ナーティヤ・シャーストラ」に基づいて、南インドでは5歳からグル（舞踊の師匠）に厳しい指導を受けたデーヴァダーシー（神の召使い）と呼ばれる寺院直属の巫女たちにより踊られるようになりました。10世紀頃はヒンドゥー教の儀式舞踊として発達し神前や王侯貴族の宮廷で踊られ、チョーラ王朝（9～13世紀）時代にその全盛期を迎えました。しかしその頃はインドに広まったとはいえ、一部の人々しか見ることが出来なかったようです。

そして19世紀の初め頃、タンジョール・カルテットと呼ばれる4人兄弟によって上演形式が整えられました。踊りの形式は今日でもその基本形式が踏襲されています。技法や演出には宗教舞踊の名残をとどめつつ 舞台芸術として広まることになり一般の人々にも見られるようになりました。また、それまでは踊り子は女性のみでしたが男性も踊られるようになり、今ではグル（踊りの師匠）のほとんどが男性です。

しかし、その後、英国統治時代にはいつて数多くの伝統が破壊され、踊りも

ちろん踊りに欠かせない音楽の演奏者も職を失い伝承が危ぶまれましたが、識者たちの協力で復興を遂げ今に至っています。

中でも、チェンナイの南にある芸術学校「Kalakshetra（カラクシェトラ）」は特に有名です。

「Rukumini Devi（ルクミニ・デヴィ）」によって1936年に設立されました。1930年代に国民の文化遺産の為に寄付金を呼び掛け忘却の闇からバラタナーティヤムの復興に尽くした最も求められたバラタ

ナーティヤムダンサーの一人でした。そして熟練した芸術家、舞踊家たちの演技、巡業、舞踊劇の創作を通してインド各地にインド古典舞踊



バラタナーティヤムを普及させました。

「Kalakshetra（カラクシェトラ）」は素晴らしい芸術の寺院と言う意味でありそれは設立者による個人、国、宗教、そして国際的な発展の力である芸術を知ってもらう為の働きでもあり真の芸術は本質的にすべてにつながることを理想とし強調していました。

古典舞踊バラタナーティヤム、音楽、絵画、工芸を訓練した生徒たちは卒業後彼ら自身の学校を立ち上げたり彼らの故郷やインド各地の大学などで教えます。

ここで学ぶバラタナーティヤムを「カラクシェトラスタイル」と呼んでいます。



ちなみに私の師匠であるK.P.Yesodha女史もここを卒業し舞踊学校の講師をする傍らダンサーとして国内外で活躍しています。

ルクミニ・デヴィの理想はカラクシェトラを通して見事に実現していくことになりました。世界中から生徒は集まりその卒業生もカラクシェトラの理想を世界に繋いでいます。インド文化遺産への貢献を認められたルクミニ・デヴィはインド政府から1956年に「Padma Bhushan」を授与されました。

カラクシェトラの劇場はルクミニ・デ



ヴィによって寺院の舞台を「Kuttambalam」のケララ形式によりデザインされています。美しい建物や舞台もまた「ナーティヤ・シャーストラ」に記述された多くの特色を持ち合わせます。

1993年インド政府により「Kalakushetra Foundation Act」は国の最も価値のある尊大なもののひとつであると宣言されました。

南インド古典舞踊・バラタナーティヤムは長い歴史の中で翻弄されながらも育まれてきた舞踊です。それは神という普遍的であり人類にとって不可欠な存在であり、計り知れないあこがれへの繋がりを担うものから、近年は高い芸術性も加わり、美しい姿勢とボディバランスを通して旋律・リズムを生命と創造の具体的表現または永遠の宇宙の祝福であると言われています。

バラタナーティヤム「Bharatanatyam」の、BhaはBhava（感情）、raはRaga（旋律）、taはThala（リズム）、Natyamは舞踊を意味しています。

では、続いてはバラタナーティヤムの踊りの神・ナタラージャについて触れたいと思います。破壊と再生の神シヴァ神は、踊りの神・ナタラージャもしくはナティーシャとも呼ばれ特に南インドではとても親しまれています。シヴァ神の起源もまたインダス文明に遡り非アリアの要素が濃いものでした。元はルドラと呼ばれ豪雨、大雨、雷電によって破壊し災禍をもたらす恐ろしい面と同時に、雨は植物を育てる生命の源であり恩恵をもたらす二面性をもつ神であったようです

が、後にシヴァ神にその要素を表したと言われています。

また、蛇を首に巻いている点、妻パールヴァティと同一視されている点は蛇神崇拝、女神崇拝の名残のようです。バラタナーティヤムでのシヴァ神の讃歌には「シヴァ神のお身体が宇宙のすべてであるとはどういうことなのでしょう。あなたの言葉を世界中の人々が語りすべてをひとつにしています。月と星々をアクセサリーのように身につけておられるあなたへ私たちは手を合わせます。至高の神、シヴァン」とあります。

では、踊りの神ナタラージャの独特のポーズが意味することをまとめます。



心臓を中心に四方に手足を伸ばしたポーズは、卍（まんじ）の形を成し宇宙を動かす力を表しています。また私たちの身体の細胞と細胞の間にも無数の卍（まんじ）の形があると言われています。それは大宇宙の秩序のなかにある自由な旋律とリズムが生み出す踊りの神ナタラージャのエネルギーと踊り手の内なる小宇宙のエネルギーがかもし出す表現力とリ

ズム感が響き合うことを意味し、踊り手はバラタナーティヤムの魅力と奥深さを伺い知ることになります。

ナタラージャの右手の太鼓は、すべてに広がる音とリズムにより内面にある悪を追い払うことを意味します。もう一つの右手は助けを求める者を救済することを表します。

左手の火はすべての邪悪を燃え尽くすことを表し、もう一方の伸ばした腕と足は無力な者に援助と生きる力を与えることを表します。右足の下で悪魔をつぶしている姿はすべての邪悪と悪事を働く人々を退治する者であることを表します。

ナタラージャの演目は他の演目よりもはるかに体力・集中力を必要としますが、心身への喜びも数倍楽しむことができます。

では、演目に表されるナタラージャを説明をします。猛獣の代名詞である虎の皮を腰に巻き、三つ又の矛を持つ点はなによりも強く時に恐ろしい姿を思わせませんが、足首に鈴を付け手には小太鼓を持ち宇宙をステージにして楽しいリズムに乗って踊っている姿も表します。そのダンスはか弱い鹿とそれを襲う獣を仲良くさせます。また、私たちも耳を澄ましこの楽しいリズムの波動を感じたとき、心身にナタラージャの祝福が広がり至福を感じることができます。反面、静かに瞑想をして世の中の平安を祈る姿も持ち合わせます。

また、都を守る為に闘いに明け暮れつつも武器を持っている女神が夫となるべ



くシヴァ神と目と目が合ったとき武器を手放し、その都は文学、音楽、舞踊の三つの文化で繁栄し都は平和になり人々は幸せになったという神話もあります。ナタラージャの踊りはあらゆる二面性を対立ではなく楽しいリズム(ひびきあい)で両極にあるものをセンタリングしてくれて心の安定へと導いてくれているように思います。



また、毎年2月(マーガ月)の月が欠けていく14日目の夜はMaha Shivaratry(マハー・シヴァラトリー)というシヴァ神を祭る日で、熱心な信者は絶食して眠らずにシヴァ神に祈りをささげながら夜を越します。夜中に讃歌を唄い続けるプージャには功德があるとされています。

南インドにある多くのナタラージャを祀る寺院では舞踊のフェスティバルが夜遅くまで行なわれます。その中でも南インド・チタンバラムにある108種のポーズの浮き彫りがあることで有名なナタラージャ寺院のフェスティバルにはインド中から踊りの名手からこどもダンサー達まで集まり、熱気に溢れた3日間を繰り広げます。

この祭典に夕暮れから夕食の用意を持って家族(3世代の)が揃って続々と寺院に足を運ぶ姿があり、砂地の座席は見る見る埋め尽くされていきます。ナタラ

ージャの踊りには先にも触れましたように、人々の苦難を排除し力を与え守ってくださることや叡智を伝える神話を楽しいリズムとともに表しています。このバラタナーティヤムの祭を通して、その文化を祖父母や父母が子や孫へと代々伝えてきました。これからも古代の祝福の光は次世代へと繋がることと思います。

インドで最古を誇る南インド古典舞踊バラタナーティヤムは踊りの神と踊り手を繋ぐタテの光から、現代ではインド中いや、世界中にヨコへの光が広がっています。それは十字架のクロスのような絶妙なバランスや美しさ強さを保ち、これからますます安定した光となって、祝福のリズムに満ちた輝かしい未来につながっていくことを願って止みません。



南インドで人気のある8つの形をしたラクシュミー女神のポスター。富、幸福、母親の力、食、こども、知恵、仕事の力、成功、の女神を表す